

1 母を背負って登った坂道

Mに初めて会ったのは、あの津波から3週間たった4月のはじめであった。

高速道路は応急処置をして再開していたが、地震でできた歪みで、車は時に大きく跳ねたりした。人影も少ないサービスエリアの商品棚は、投げやりとも感じられるように商品がばらばらと置いてあるばかりであった。灯を落としているのか道は暗く、行き交う車も自衛隊か警察、消防の車両ばかりで、敗色の濃い戦場に向かうような心もとなさであった。

大船渡から気仙川沿いに下っていくと、気仙川に矢作川が合流する辺りから様相が一変した。テレビの映像で何遍も見た光景であるにもかかわらず、ただ絶句するよりほかになかった。

河原には瓦礫に混じって大型のタンクローリーが横倒しになっていた。寺のものと思われる大きな屋根が、それだけが壊れずに瓦礫の上に載っていた。一抱え以上ある松の巨木が、横たわっていた。骨組みだけが残った鉄骨建築物が、どのような力が加わればこのようになるのか、奇妙な曲がり方をしていた。壊れずに残ったコンクリート建造物には、汚れて擦り切れた布のようなものが無数に付いていて、壊れずに残ったことでより一層、被害の激甚さを示しているようであった。鉄道の線路がどこを走っていたのか、知る手掛かりすらなかった。街がまるごとなくなっていた。

私たちは言葉を失っていた。悲しみからくるものではない、体の心を絞られように涙がにじむのをこらえることができなかった。

道路の部分だけは瓦礫が撤去されていて車は走れることはできたが、道の両側の瓦礫の山は多いところは5、6メートルほどあって、道幅の狭いところでは、道路脇の瓦礫をこすらないように注意が必要であった。津波によって運ばれた釘などでパンクすれば、立ち往生する以外になかった。修理をする工場などはないのだ。街の人のものと思われる車は、洗車など論外で、一様に汚れていた。

Mは避難所になっていた山の中腹の食品加工会社の作業場にいた。私たちは夜明けを待って高田に入り、何人かの方に合わせて昼過ぎには帰途につく慌ただしい訪問を余儀なくされていたため、Mとは避難所の外で立ち話をしたただけであった。

Mが津波に吞まれて奇跡的に助かったことを知っていたので、そのことを聞きたかったが、初対面ではあり、聞くことははばかられた。

ただ、話の中で、豆腐屋を再建するのだと聞いて、聞き違いではないかと思わず聞き返した。この時は、水は一日2度、自衛隊の給水車が各避難所を回って行なっていたし、食料はカロリーベースでは間に合うようになってはいたが、おにぎりが来るのかパンなのかは来てみないとわからないという段階であった。もちろん電気はまだで、我々の持っていったもので一番重宝がられたのは携帯ラジオと乾電池という段階だったのだ。街を覆い尽くした瓦礫の中では、各地からの応援の消防隊員が行方不明者の捜索をしていて、生活の再建などを話題にするのは、もっとも先のことのように思われた。筆者には、瓦礫を撤去することが本当にできるのかさえ疑わしく思えた。ましてMは67歳である。商売を続けるなどは思いもよらなかったから、Mが商売再開を口にするのを聞いて、そのタフさに驚き、感動さえした。

ところが、5月に再会したとき、その時はK地区の避難所の庭先でバーベキューをしていてMは幼馴染のYと隣合せにビールを飲んでいたので、Yに向かって、

「あの時はあのまま死んでしまったほうがいいと思ったが、今は本当に助かってよかったと思ってる」と言っているのを、偶然に聞いたのである。Yもまた重病で寝たきりの奥さんを抱えての苦しい避難生活をしていて、Yが「そうだ、本当にそうだ」と相槌を打つのを聞いていて、とても筆者が話に割り込むことなどできない重いものがあった。

4月のはじめにはあれほど元気に豆腐屋を再開するのだと聞いていただけに、疑問が強く残った。

4代続く豆腐屋の主 M は、あの日、いつもと変わらない日を送っていた。あまりに変わらない日であったので、あの地震に襲われた時まで何をしていたか覚えていない。あるいは、途方もなく大きな体験をしたためにそれ以前の記憶が失われてしまったのかもしれない。

あの日は、春にはまだ遠い3月の高田でも、とりわけ寒い日であった。朝の早い豆腐屋の仕事は昼前には一段落する。戻った寒を避けて、室内で午後のまどろみの中にいた。2時46分、突き上げるような強い地震が来た。家全体がきしむように揺れ、室内の物が散乱した。頑丈な仕事用の油タンクが倒れた。立っていることもできず、妻と娘は悲鳴を上げた。とにかく外に避難した。2月に凍結した路上で転倒し、背骨を折って動けずにしたため骨折は治ったものの今も歩行が不自由な89歳の母親を毛布にくるむようにして家族4人は外に出た。別棟の長男の家族も出てきて、一家は道路脇の空き地に難を避けていた。

車で避難するため通りかかった M の幼馴染の Y は、老母に気づいて「ばっば、早く逃げろ」と声をかけている。後に Y はその光景を近所の人たちとのんびり立ち話をしていると思い、「ばっばが話っこさしてだが」

と、大丈夫だろうか心配していたと言っているが、M は否定する。そこに居たのは M の家族で、Y も M もお互いに気づいていなかった。それほどに混乱していた。

その間にも強い余震があった。無数とも言える余震がつづいた。そこにしっかり踏ん張っていることがすべての元であると信じてきた大地そのものが、今では頼りないものを感じられ、M は度を失った。「パニックになって何も考えられなかった」と M は後に繰り返し語っている。

三陸の沿岸部に生まれ育った者には地震と津波はセットで教えこまれている。地震があれば津波を疑って、とりあえず高台に避難することは誰でも知っている。だが、M の家は海岸から直線距離で3キロ弱、背後の山まではすぐのところの位置している。1960年のチリ地震による津波で広田湾では6メートルの潮位を観測している。松原が一部破壊され、平地の1キロほどが冠水しているが、16歳の M には他人事のように思えた。そうしたことも、素早い避難行動を遅れさせたかもしれない。

M の家族が高田一中をめざして動き出したときには津波の第1波が到達していたと思われる。見ていた人によると、第1波は1メートルほどの高さであったという。その波が引くよりも早く第1波にのしかかるように第2波が来た。それは松原を越える巨大なものだったというから、30メートルは超えていたことになる。

M の家から340号線高田バイパスまでは50メートル、右折してバイパスの坂道を200メートルほど登った右手に高田一中への急坂がある。そこまで行けば大丈夫だろうと思った。

M は母親を背負って必死に走った。背後には家屋を破壊しながら追いかけてくる不気味な浪の音が聞こえる。健康な男とはいえ、M は67歳である。走っていると思ったが思うように脚は動かず、他の4人から遅れた。家族に向かって、俺に構わずに先に行けと言って坂道を登った。もうすぐ一中への急坂にたどり着こうかというとき、波に吞まれた。

先に高田一中に着いていた家族はやきもきしていたが、家を押しつぶし、バキバキと音立てて電柱をなぎ倒しながら押し寄せる濁流を、立ちすくんで見ているだけであった。何もできるものではなかった。

340号バイパスは沢道を拡幅して山上へ向かうため、坂の途中から両側が V 字型になっていて、波には格好の通り路になった。濁流は遮るもののない坂道を駆け登った。

「背後から小型のトラックに追突されたように」(M 談) 波をかぶった M は、路面に叩きつけられた。見ていた人の話では、背負われた母親は、はじかれたように M のはるか前方に飛ばされたという。

M は波に翻弄されながら、息を詰め、水面を目指してもがいた。母を背負って坂道を登ってきた M はすでに息を切らしていた。長く息を詰めていることはできなかった。こらえきれずに泥水を飲んだ。M は二度飲んだことまでは覚えている。そこで意識を失った。一瞬のことであった。

Mにとって歯嚙みするほど悔しいことであるが、Mを襲った波は、そこから坂を5、60メートル駆け登ったところで急速に勢いを失うのである。あと50メートル、あと数十秒、という悔いが残ることになる。

頂点に達した波は、そこでしばらく停止した後、初めはゆっくりと、その後押し寄せた時よりも勢いを増して引いていくのだが、その時道路脇の窪地のようになっているところに、波が運んできた材木が滞留した澱みが出来ていた。Mは材木に挟まれるようにしてそこに押し留められていた。

それを発見した高田一中に避難していた人の中から声が上がった時、一人の男がMに向かって走り込んだ。Mの長男のTであった。この日は真冬が戻ったような寒い日であった。水中に入るのは、それだけで危険なことである。Tは父親をめざして坂道を下った。下るにつれて水深は増してゆく。膝、腰と水に浸かるにつれて水の抵抗が増し、動きが鈍くなる。転倒は命取りであった。父に達したときには、肩までが水に浸かった。

もし、流れの淵のような流木の澱みに留められることがなければ、Mは発見されることもなかったろう。息子のTが躊躇せずに飛び込んでいかなければ、Mは引き波にさらわれていたろう。そればかりか、タイミングをあやまれば、助けに行ったTもまた、坂道を駆け下る流れに運び去られることになったかもしれない。偶然が幸運にもMを救い、母親は亡くなった。

高田一中に運び上げられたMは、直ちに救急車で隣市の大船渡の県立病院に運ばれた。肋骨を二本骨折し、右まぶたの上に裂傷を負ったが、この時にはこの程度は軽傷扱いであった。5日後には退院させられている。

この入院中にMはNHKのインタビューを受けている。筆者は偶然、それを見ていた。もちろん、その時には後にMに会って話を聞くことになるとは思ってもよらないことであった。

Mはギョッとした表情を浮かべた後、戸惑ったように、質問に要領を得ない答えをするだけで、終始硬い表情であった。とてものこと、九死に一生を得た男の喜びの表情とは程遠いものであった。

病院に運ばれ落ち着きを取り戻したMは、助かったことを素直に喜んでいない。むしろ「あのまま死んでしまったほうがよかったのではないか」と思っていた。

パニックに陥って逃げるのが遅れたことが悔やまれた。あとほんの少し早く逃げていれば、そして、もう少し早く走っていれば、母親も助かっていたはずだ。。

家も車も、そして何よりも生活を支えた道具類が失われた。

望んで継いだ仕事ではないが、今では自負するものがある。

けっして儲かる商売ではないが、地道に販路を拡げてきた。スーパーマーケットができ、供給を誘われたときにも、大量生産で味を落とすくらいならと、誘惑に耐えて踏ん張った。そうした姿勢が、味に対する信頼を得てきたと考えている。食に対する安心・安全が言われるようになったことも、手作りを通したMに味方してきた。

自分一代で終わる家業だと思ってきたが、体が動くうちは家族を支えてやっていけばいいと考えていた。それがなくなってしまった。

自分の年を考えれば、家を再建すること自体が困難であるのに、さらに商売道具を一から揃えるのは新たに借金を積みますことになるだけではないのか。しかし、収入の目処が立たなければ、家を再建しても生活の目処が立たない。街そのものが消えてしまった今では、働こうにも働く場所がない。一生を懸けてやってきた仕事なのだ。今更、豆腐作り以外の何ができようか。

堂々巡りの、抜け道のない迷路をさまよっていた。

家業を継がせたい父親の足元を見て、免許を取り立てで、当時としては高価な乗用車を買ってもらい10日ほどで大破してしまった、若い頃の苦い記憶までがよみがえったりした。

ここでもMを救ったのは、息子のTであった。自分を水の中から救い出したのがTであることを知ったのは入院中であったが、そのTが家業を継ぐことを申し出るのだ。Tも震災で勤め先をなくしている。40近い手習いは容易ではないだろうが、門前の小僧である。何より自分で決心したことである。

Mには大きな光明となった。

ナナカマドが色づく10月半ば、仮設住宅にMを訪ねた。4畳半2間の一室は亡くなった母親の仏間になっていて、香華が絶えないようであった。誰か知り合いから探したのだろう、引き伸ばされた写真は少しぼやけていた。

Mは今、息子のTと一緒にインターネットで中古の出物を探しているのだといった。豆腐屋の機材は、既製品がなく、注文を受けてから生産するため高価なのだという。よさそうなものがあると、問屋に見てきてもらうが、耐用年数を超えていたり、また、その店の構造に合わせて作られていて使い勝手が悪そうだったり、なかなかいいものが見つからないで苦慮しているともいっていた。

また、当面の仮設店舗を作る土地も探しているが、こちらも容易ではなさそうだ。高田では、復興計画が出来るまでは本建築は原則、許可にならず、プレハブの仮店舗のみが許されている。浸水地区には仮店舗も許されないことから山間部を探すのだが、山間部に平地は少なく、道路に面した土地となると限られていて、それでも心当たりを打診しているのだという。

豆腐作りに欠かせない水も確保できるのか、問題は山積のようであった。

仮設住宅の造りの悪さに悩まされているとぼやきながらも、しっかりとすべきことを持った人の強い目をしていて、

Mは確実に歩き始めていた。

雑談が途切れたとき、Mが唐突に、

「だけんども、あん時一中になんで救急車がいだっけがな」

と言いだした。自分が波の中から助けられ、高田一中に運び上げられて救急車で運ばれた時のことを言っているのだ。

普通に考えれば、誰かが消防署に連絡して救急車が来たということなのだが、あの時には、消防本部自体が津波でやられている。連絡しようにも連絡する先がない。携帯電話も不通であった。最後まで避難を呼びかけた消防団員に大きな被害が出ている。

言われてみればその通りで、筆者も違和感なく聞いていたのはあの日の実態を知らないからで、Mはその疑問をずっと抱えていたのだ。

その疑問は同行のKがあっさり解決した。Kはあの時高田一中に避難していた。大船渡に患者を搬送して戻った救急車は、帰るに本部も街もなく、一中に避難していた、そこにMが運び上げられ、大船渡にMを搬送したのだという。

Mは7カ月ぶりにぶりに溜飲を下げたのであったが、あまりにあっけない解決に、はぐらかされ、戸惑っているようでもあった。

流木に止められて流されずに助けられたこといい、救急車で直ちに病院に運ばれたことといい、Mは偶然の重なりに助けられたと言っているだろう。

帰り際、テレビのインタビューで硬い表情をしていたことをからかい気味に言うと、Mは大きな目をいたずらっぽくくりとさせて、
「テレビはアポなしでくるもんだなや」

と言って、にやりとした。アポがあれば、気の利いたセリフのひとつも言ってやったのにと言わんばかりであった。隣との薄い壁の仮設にいることも忘れて、皆で大笑いした。

Mを訪れた帰り道、Mが母親を背負って登った坂道を歩いてみた。車では何度か通ったことがあり、その時にはさほどに感じなかったが、歩いてみると、坂はかなりの勾配があった。

冷たい雨は上がったものの、どんよりとした夕暮れであった。運動不足の筆者は汗ばみ、息が上がっていた。自分の荒い息遣いをMのあの時の息遣いに重ねてみると、あの日のMの恐怖と苦悶に、ほんの僅か近づくことができたように思えた。

Mが波に呑まれたあたりで立ち止まり、振り返ると、瓦礫は片付けられているものの、街は7カ月たった今もなお黒褐色一色である日のままであった。街の再建もMの店の再開も容易でないと考えざるを得なかった。だからこそ、今度こそMには、この坂を登りきってもらいたいと願わずにいらなかった。

(2011・12・10 T)